

## 「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画（原案）」に対する公聴会

平成 25 年 2 月 24 日（日）11:20～11:35

高崎河川国道事務所 1 階会議室

発言者：公述人 1

こんにちは。公述人のきょう最初の昭和町在住の 73 歳、■■■■と申します。座らせていただきます。利根川水系利根川・江戸川河川整備計画原案の概要を読んで、私は前々から何度もみてきた高崎から川原湯温泉までの河川沿いの様子を時間の許す限り歩いたり自転車、電車を利用して見てみました。これは、概要にまとめられていることと実際の様子とを比較確認してみたいという思いがあったことと、あとはやはりこの河川整備計画についてこれから河川は単なる治水、利水だけではなく、エネルギー源としても見直していくべきところになっているのではないかなということを考えていたりとか、あるいは産業構造の変化の中で水利権の見直しが必要ではないのかということも考えていたりしたんですけど、そういうことについてどのように検討されているか、ということが非常に興味がありました。河川整備を総合的に検証するのであれば、各テーマとテーマを繋ぐ課題を示してほしいと思います。テーマがそれぞればらばらに検討されたのでは何の意味もないと思うんですね。ところが今までの資料を見る限りテーマ毎の検討はしてもテーマとテーマをつなぐ検討はされていない。総合的にというのであれば、やはりそういうものはあっていいのではないかなという期待もかねて、いろいろ調査しました。管轄機関の連携についてもそのことがやはりみんなそれぞれ管轄機関の違いでバラバラに検討されているようなことを、やはりこれからは検討すべきであろう、ではないのかなと期待してそれでいろいろ調査してみました。というのも、歩いてみてわかったのは中心市街地は空洞化しているのにかつては河川沿いは遊水の地として家など建っていなかったのに、そこにむしろ河川沿いに家が建ち並んでいる、しかも、農業地、緑地、工業地、商業地がそのためにバラバラに存在するような様子になりました。そして、やたらと広い道路が両方に走って人々のつながりを断ち切るような町並みがどんどん広がっているのに改めて驚きました。こうした変化が河川整備施策だけで起きているのではないと思いますが、まったく無関係ではないと感じました。そうしたことを感じるいくつかの具体例を申し上げたいと思います。1 番として整備計画原案 6 の 1 森林水源林の機能保全云々とありますが、水道事業の利水事業で安定水利権の中にそれらの存在は一切切り捨てられています。また、火山灰によるレキ層が扇状に広がる大地上の町は地下水が豊富にあるにもかかわらず、一部地域の地盤沈下を理由に多くの地域で地下水が切り捨てられつつあります。田の保水力を維持する農業政策を貧弱になるに任せています。森林水源林の機能の保全が私達の生活とどのようにつながるのかという視点が見えてこないのです。ロ 6 の 1 で、やはり流出土砂量の変化に対し、として色々書かれています。「流域全体及び海域を視野にいたした総合的な河川管理が必要」とまとめています。たしかに、日本周辺の多くの海岸線が後退していることが大きな問題になっていますが、これも流出土石流の変化の問題の 1 つです。しかし、これはダム建設の推進と大きな関わりがあると言われていています。河川管理だけで対応できないのではないのでしょうか。ハ鳥川の君が代橋基準地点の基本高水量は県は 2, 600mm<sup>3</sup>/s、国は 2, 000mm<sup>3</sup>/s としています。同じ地点で異なるのはなぜでしょうか。いずれに問い合わせてもいまだ明確な答えは得られていません。倉渚ダム建設計画では無駄な税金を使う必要はなかったのではないかと、責任の所在もわからない事業が進められる危険を感じます。二 6 の 4 に利根川、江戸川ではということで「先人の知恵に学ぶことが肝

要です。施設の保全、伝承に取り組みます」と提起されていますが、高崎市の烏川沿いを見る限り、その先人の知恵で作られ、ついこの間まで守られてきた二線堤や霞堤が跡形なく壊されつつあります。今回の概要の5で「河川の整備の実施に関する事項」の図面で示された烏川右岸の築堤計画箇所の堤防は造ってはいけない場所ではなかったのでしょうか。このような形です。しかし今、河川間近に築堤が進んでいます。この地は烏川右岸側に連なる観音山丘陵の一部根小屋地区の根小屋七沢暴れ沢の沢水を烏川に落とすために、川に直角に交わる深い堀がたくさん造られてきたのです。だから川沿いに平行に連続した堤防など造れない地形だったのです。しかしそこは今まで遊水の地として良質な米作地、畑作地として栄えてきたのです。川の間近にまだ完成もしていない造られ始められた築堤の間際に家が建ち始めているのを見て、河川計画とは何なのか、都市計画とは何なのか、河川計画と都市計画はどのように関わっているのか、総合的にの意味に疑問が広がるばかりです。ホ5. 1. 3の水質改善として、4つのテーマが掲げられていますが、私はその中の吾妻川のところで、「新たな中和対策について、事業化に向けた調査及び検討を進めています。」については納得出来ません。なぜなら、「吾妻川上流における流入支流は依然として酸性の強い状態である。」と断じていますが、実際はいくつもある支流全部が強い酸性ではないのです。そうでなければ、流域にはたくさん発見されている古代遺跡は存在しないはず。吾妻川は酸性になっているとしても、全部の支流が酸性であるという考え方は正確ではなく、対策の立て方にも問題が生じるのではないのでしょうか。次に問題は、その水質改善策として中和事業しか提案していませんが、温泉水は酸性の成分の中に色々の成分が含まれているのです。その成分の中にヒ素が多量に含まれており、中和することによって、中和生成物が溜まり続け、その中和生成物の中で、より危険なヒ素化合物となることが無視されていることです。どういうことかということ、品木ダムから浚渫したものを排水処理して、土捨て場に積み上げる為に、セメント固化するのですが、このセメントとヒ素が反応して、一部が水溶性ヒ素酸塩となって溶出してくるのです。その堆積した山が崩れないという保証はないのですから、このヒ素を少しでも安全に処分する施策が求められるのが吾妻川の水質問題に加えられていないのです。そして、マスコミ報道でもこのことは取り上げられていません。少し取り上げられている記事を。ここにこういうのがあります。帰りに見ていただければと思います。事務局の人がお渡ししてくれると思います。朝日新聞の記事なんですけれども、記事はありますけれども、でもこの記事を見てもあまり正確ではありません。身の細る思いでこのことが、もっともっと取り上げられるようになることを期待しています。現場を見ての感想をさらに付け加えるならば、この処分場がただ穴を掘っただけのもので、ヒ素を含んだ中和生成物が微生物の影響を受けやすい処分場であることがわかります。ですから、そこに廃棄することは、そのヒ素化合物がさらに危険な有機ヒ素化合物に変化してしまうおそれもあるということです。流れ続ける酸性水を中和し続ける品木ダムは、トイレのないマンションといわれる原子力発電になりつつあると思われてなりません。ヒ素被害が発生しない前に対策を立てることをこの計画の中に加えてほしいものです。ある人はこの施設は草津温泉の風評被害を防ぐ為に必要であるといっていました。さらに、ダムのおかげでヒ素中毒の危険性も防げるんだ、と言っています。しかし、調査されてないからそういうことわからないんだよ、というふうに言っている人もいます。しかし、私は川沿いを歩いて、何十年と川で釣りをしてきた太公望の方や、住民の人に、そんな話を聞いたことがあるかと聞いてみても、そんなことはない、昔の人がそんなところに住むわけがないじゃないか、と自信を持って答えてくれます。ただ、巨大な建造物を建てようとしたり、地質に合わない作物を作ろうとする人には酸性の川は不都合のようです。しかし、地質や水質は表面的に変えることができても、もともと人間が作りだしたものではないのです。科学技術が発達し、何でも人間の都合の良いように関わろうとする思い上がりを感じる、このようなと書いてありますが、これは公共で

直していただけると助かります。公共事業について、政官財界はもとより、社会全体で考え直すことが出来ないのかと思わざるをえません。利根川は日本の中心に位置し、しかも首都圏の人々の命を支えていることは申し上げるものでもないことですが、この計画にその地域に暮らす人々の声が聞こえてきません。大地の声が聞こえてきません。大切な事業をそれぞれの地域の状況見聞、人々の声等々、集約しないで作成しているように思える原案に、血が通うような工夫を取り入れられることを心から願っています。以上です。

以上